



# Close up だて



## — 新たな局面へ — 温暖な伊達ならではの 「冬野菜」



J A 伊達市野菜生産部会協議会会長の大滝真さん



みずみずしい春菊の栽培

**今**、伊達の農業に新たな動きが歩みを進めています。いち早く西洋式農法などの新しい知識や技術を積極的に導入、北海道農業の発祥地として発展し、まさに農業とともに歩んできた伊達市。まちの誕生から140年余り、現在でも農業が伊達の主要産業であることに変わりはありません。少量多品種の栽培で「野菜のデパート」とも評される伊達の農業に「冬野菜」という新たな可能性が輝きを見せ始めています。

冬野菜の栽培は、今から約5年前、現在J A伊達市野菜生産部会協議会会長を務める上長和町の大滝真さんから市内の農業者5名の取り組みがきっかけ。

スーパーなどの店頭に並び野菜が、道内産から本州産に切り替わる北海道の長い冬、雪が少なく気候が特に温暖な伊達の優位性を生かし、ビニールハウスで作られた

ハウレンソウや小松菜、チンゲンサイなどが道内の主要都市へと出荷されています。

市ではJ A伊達市と連携し、平成25年度から冬野菜栽培に従事する農業者への支援を始め、現在18軒にまで広がりを見せています。

しかし、課題もあります。

通常の4分の1程度の大きさの「ミニ白菜」や春菊などの冬野菜を栽培する大滝さんは、「伊達は野菜が特産品と言われ、農業者それぞれも確かな技術を持っている。でもブランド化された特定の品種がない。恵まれた温暖な気候を生かした「冬野菜」への取組みが伊達市に今以上に広がると嬉しいです。」と話します。

北の湘南伊達と言われるこの町の気候を武器に「伊達の冬野菜」がブランドとして根付くことが期待されます。

### 表紙のはなし



1月8日、カルチャーセンターで恒例の「書き初め大会」が行われました。お題はそれぞれ練習してきたのですが、それでも開始時間まで熱心に練習します。先生の合図がありました。本番です。5枚の画仙紙しか使えません。慎重に、でも勢いが必要なところは力強く。さて、出来栄は？

### 楽画記

■古代中国の賢人、孔子の言葉「40にして迷わず」…。知力が最高潮で最も優れた判断ができるはずの僕の使命は、市民の皆さんの役に立てる努力を続けること。しかし、僕の目に「役に立たない」「迷惑をかける」ように感じる周囲の仕事ぶりは気弱な本性を隠して「時々」熱くなる場面も…。いや、かなり「頻繁」です！（じ）

■鹿を目の当たりにして驚いた時から2年が経ち、道民の夫と本州から来た私との間でも、初めは生活習慣や環境、方言等の違いで日々たくさんの驚きと戸惑いがあり面白いものでしたが…時々お互いに譲れないことも多々…。それが最近、夫や周りの影響を受けて話しているそんな自分にまた驚くようになりました。（わ）

■今冬、スキーデビューの我が家。息子は怖がることもなく夫とともに頂上から滑り下り、とても喜んでいました。しかし、私にだけ恐ろしい場所、「リフト」が。高い！揺れる！ぎゅっと目をつぶりに到着を待ちますがそれまでの時間の長いこと。体力の大半をリフトで消費するスキー…って…。畏はどこにでもあるようです。（と）